

3 現代学生の「移動」問題

—在学中に進路変更を希望する学生の実態と背景—

愛媛大学 准教授 山田 剛史

現代学生の移動希望の実態

問題の所在

大学生は現在所属している大学や学部・学科に対してどの程度適応感を抱いているのか。2008年調査に引き続き、今回の調査においても、所属大学や学部・学科に対する適応度を捉える指標として、転学部・転学科（大学内での移動）、転学（大学間での移動）、退学（大学外への移動）（退学は新規設問）の3種類の移動に対する意識（希望度）を取り上げている。この問いは、現在多くの大学で問題になっている中退率抑制において極めて重要な視点を提供してくれるものだと考えている。実際に中退という選択を取る前には必ず前兆（準備期間）がある。学業面・精神面・経済面・生活面などの問題を一定期間抱え続けた結果行動に出るのが普通だ。そういう状態に陥らないために、学生の心情を把握し、事前に問題解決へと導くことで、学生・大学双方にとって不幸な移動（中退等）を回避することが可能となる。ここでは、その実態と背景について調査結果も交えながら考えてみたい。

全体の傾向「2・3・4」

まず、全体の傾向としては、退学「大学を辞めて、大学以外の進路に変更したい」2割（20.2%、「よくある」＋「たまにある」の%、以下同）、転学部・転学科「同じ大学の他の学部や学科・コースに移りたい」3割（30.0%、2008年調査32.4%）、転学「他の大学に入り直したい」4割（41.7%、同45.7%）と、決して

少なくない学生が意識していることが確認された（2章図2-4-1）。

属性別にみると、①入試難易度別では、偏差値「60以上」が転学部・転学科について相対的に高い割合を示し、偏差値が下がるにつれて転学や退学を考える学生の割合が高くなっていること（図2-4-2）、②大学志望順位別では、志望順位が下がるにつれて転学を考える学生の割合が高くなっていること（図2-4-3）、③学年別では差がみられないこと（全学年同程度の割合）などが示された。志望順位が低く、入試難易度の低い大学が、学生の移動に最も切実な問題を抱えているという結果が示された。

なぜ、学生は移動を考えるのか

3つの移動それぞれに対し、そう思う理由を自由記述で聞いている。その傾向をみると（表2-4-1）、第一に、転学部・転学科では“他に学びたいことが見つかった”など「やりたいことの変更や発見」「他の分野への興味」といった積極的な理由も多く挙げられていた。これは近年の学生の多くが具体的な目的・目標を持たず、むしろそれを探すために大学に進学してきているといったことから（図2-1-10など）、在学中にやりたいことや学びたい分野が明確になってきたことによる現在との不一致解消という意味合いが強い。多くの大学で学内での移動に関する諸規定は定められているが、部局間での移動となるとまだ敷居が高い。今後、こうしたケースは更に増える可能性もあるため、大学として入学時点での弾力化や入学後の

移動の柔軟性などを検討しておくことも重要と思われる。

第二に、転学では“入りたい大学ではなかった”などの「不本意入学」や、“大学（学生）のレベル・ランク・知名度が低い”などの「レベル・知名度」といった否定的な理由が非常に多く挙げられていた。とにかく大学を変わりたい、今の大学は嫌だ、という現状に対する強い不満感を抱いている学生たちである。各種満足度との相関結果をみても（下表）、転学を希望する程度が強いほど、授業・教育システムや教員、友人関係、総合満足度などに対する満足度が低くなっていることがわかる。

第三に、退学では“自分の夢や将来のため”“海外に行きたい”などの「やりたいことの実現」や、“専門学校で学びたい”など「専門学校希望」といった積極的な理由も挙げられているが、“学費が高い”“早く経済的に自立したい”などの「就職・経済的事情」といった退学固有の消極的な理由も少なからず挙げられていた。下表においても、「授業に興味・関心をもてない」との間に正の比較的強い相関がみられるなど、（高い学費を払ってまで）大学で学ぶことの積極的意味を失っている学生たちであると言える。あるいは、相関には表れないが、学びたいと思っても、経済的な事情で継続して学ぶことができない学生たちも存在するだろう。奨学金や免

除制度などの充実も、学生の移動を考える上で重要な方策の一つと思われる。

どうすれば不幸な移動を防げるか

大学を取り巻く現在の状況において、学生の移動問題は不可避であろう。どうしても学生と大学・学部等の間にミスマッチは生じうるものである。そうした認識を踏まえて、①まずそのミスマッチが何によるものなのかを把握（アセスメント）することが肝心である。そして、②入学時（高校→大学）のミスマッチ（高校時に希望した進路と異なる場合など）であれば、進路選択意識の強化や入学前教育、受験制度の改定など場合によっては高大接続を視野に入れた検討が必要であろう。③入学後（大学）のミスマッチ（期待していた教育内容や学生生活と異なる場合など）であれば、初年次教育の徹底による学生の意識転換や魅力ある教育カリキュラム・授業の実施、問題を抱える学生を早期発見し、対応するための教職一丸となった学生支援の充実が必要であろう。④また、将来（大学→社会）のミスマッチ（進学した学部・学科と将来目標が接続しない場合など）であれば、学生のニーズにも表れているが（図2-4-5）、早い段階からのキャリア教育・支援などの体制強化・充実が急務の課題であろう。

表 移動希望度と授業に対する効力感・興味および大学に対する満足度の関連

	同じ大学の他の学部や学科・コースに移りたい	他の大学に入り直したい	大学を辞めて、大学以外の進路に変更したい
移動希望	同じ大学の他の学部や学科・コースに移りたい	-	
	他の大学に入り直したい	.438**	-
	大学を辞めて、大学以外の進路に変更したい	.355**	.462**
効力感	授業についていけないと感じる	.146**	.081**
興味	授業に興味・関心をもてない	.220**	.219**
満足度	施設・設備（図書館やインターネットの利用など）	-.008	-.159**
大学に対する	進路支援の体制（就職セミナーやガイダンスなど）	.007	-.096**
	教員（専門性の高さやよい影響を受けるなど）	-.095**	-.228**
	授業・教育システム（教育内容やカリキュラムなど）	-.094**	-.256**
	友人関係	-.089**	-.248**
	大学生生活を総合的に判断して	-.135**	-.369**

** 相関係数は1%水準で有意